女の姿

田中貢太郎

青空文庫

明治三十年比のことであったらしい。東京の本郷三丁目あたりに長く空いている家があったのを、美術学校の生徒が三人で借りて、二階を画室にし下を寝室にしていた。

夏の夜のことであった。その晩はそのあたりに縁日があるので、夕飯がすむと二人の者は散歩に往こうと云いだしたが、一人は従わなかった。

「杖頭もないのに厭なこった」

「まあ、そんなことを云わずに往こうじゃないか、今晩はきっと美人がいるぜ」

「杖頭がないのに、美人を見たら、尚おいけない、厭だ、厭だ」

「人のすすめる時には往くものだよ」

「厭だ、厭だ、人の汗なんか嗅いで歩るくのは、御苦労なこった」

こんな会話があってから、二人の生徒が出かけて往ったので、家に残った生徒は横になって雑誌の拾い読みをしていたが、睡くなったので蚊帳の中へ入って寝た。そして、とろとろとしていると、何か物の気配がするので眼を開けて枕頭を見た。枕頭になった蚊帳の外には一人の女が坐っていた。生徒はびっくりして眼を※ったところで、女の姿はもう無かった。

生徒は鬼魅が悪くなったので、寝床を飛びだして二階へあがり、洋燈の燈を明るくして顫えていると、間もなく二人の生徒が帰って来た。

「おい、ちょっと二階へあがってくれ、話がある」

そこで二人の生徒が二階へあがってみると、後に残っていた生徒がみょうな顔をしている。
「どうした、何をしているのだ」
「まあ坐れ、少し話がある」と云って、二人が坐るのを待って「この家は化物屋敷だぜ」
「どうして、何かあったのか」
「君等が出て往った後で、蚊帳へ入って、少し睡って、今度眼を覚まして枕頭を見ると、蚊帳の外に女が坐っていた」
それを聞くと二人の生徒が笑いだした。
「君が恐ろしいと思ってたから、見えたのだ、神経さ」
と一人が云うと、一人が、
「だからいっしょに出よと云うに出ないからだよ」
「とにかく、僕は厭だ、君等が出ないなら、僕一人で出て往くよ」
翌日になると彼の生徒は、二人に別れてそこを出て往った。二人の者は出て往った朋友の臆病を笑っていた。
そして、それから五六日経ってのことであった。二人でいっしょに寝ていた生徒の一人が、ふと眼を覚してみると枕頭に一人の女が坐っていた。彼はびっくりして睡っている朋友を揺り起した。
で、その朋友も眼を開けて枕頭を見た。やはり坐っている女の姿が眼に入った。

翌日になってその二人も他へ引越して往ったので、その家はまた暫(しばら)く空家になっていた。

青空文庫情報

底本：「日本怪談大全　第二巻　幽霊の館」国書刊行会
　　1995（平成7）年8月2日初版第1刷発行
底本の親本：「日本怪談全集　第二巻」改造社
　　1934（昭和9）年
入力：川山隆
校正：門田裕志
2012年5月22日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

女の姿

田中貢太郎

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/